

感染症発生動向調査情報による徳島県の患者発生状況（平成22年）

徳島県立保健製薬環境センター

片山 幸・石田 弘子・嶋田 啓司

Infectious diseases surveillance reports in Tokushima Prefecture in 2010

Miyuki KATAYAMA, Hiroko ISHIDA and Keiji SHIMADA

Tokushima Prefectural Public Health, Pharmaceutical and Environmental Sciences Center

I はじめに

当所では、「徳島県感染症発生動向調査実施要綱」に基づく徳島県感染症情報センターとして、徳島県における感染症の発生情報の収集、解析を行っている。解析した情報は週報や月報として医療機関や県民等に還元し、感染症の拡大防止や公衆衛生の向上に努めている。

今回、平成22年1月から12月までの患者発生状況についてまとめたので報告する。

II 方法

感染症発生動向調査における患者届出対象疾患は、「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」により指定されている一類から五類感染症、新型インフルエンザ等感染症の全数把握対象疾患の76疾患、指定届出機関から届出を受ける定点把握対象疾患の25疾患とした。

感染症の発生情報は、定点把握対象疾患のうち、内科、小児科、眼科及び基幹定点週報分は、月曜日から日曜日までを1週単位で、性感染症定点及び基幹定点月報分は月単位で集計解析を行った。

III 結果及び考察

1 全数把握対象疾患の届出状況（表1）

(1) 一類感染症

一類感染症の届出はなかった。

(2) 二類感染症

二類感染症は、結核188件の届出があり、月別の届出数は10～21件で推移した。年齢層別では、3～92歳から届出があったが、60歳以上が約7割を占め、年齢が高くなるにつれて届出が多くなる傾向が見られた。症状別では、患者（死亡（疑い）例も含む）が157件、疑似疾患

者が5件、無症状病原体保有者が26件あった。

(3) 三類感染症

① 細菌性赤痢

細菌性赤痢は8月に1件の届出があった。原因菌は *Shigella sonnei* であり、感染地はバングラデシュと推定された。

② 腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症は27件の届出があった。過去5年間では集団発生があった平成18年（49件）に次いで多く、その他の年は13～19件の届出数で推移している。届出時期は11月がもっとも多く、次いで6月～8月の夏場に多く発生する傾向が見られた。症状別では、患者が19件、無症状病原体保有者が8件であった。

表1 全数把握対象疾患の届出数

類型	疾病名	平成22年	前年
二類	結核	188	198
三類	細菌性赤痢	1	0
	腸管出血性大腸菌感染症	27	18
四類	A型肝炎	4	1
	つつが虫病	1	3
	デング熱	2	0
	日本紅斑熱	5	3
	レジオネラ症	2	0
五類	アメーバ赤痢	3	5
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	3	0
	後天性免疫不全症候群	9	4
	ジアルジア症	1	0
	梅毒	3	2
	破傷風	5	1

年齢層別では30歳代の届出が最も多かったが、「患者」としての届出は5歳未満が最も多かった。重症の合併症である「HUS（溶血性尿毒症症候群）」は報告されていない。型別は「O157 VT1VT2」が18件、「O157 VT2」が5件、「O26VT1」が4件であった。感染経路や感染源は不明な例が多いが、無症状病原体保有者は患者である子や孫との接触による感染が推定される例があり、二次感染予防について啓発が必要である。

(4) 四類感染症

① A型肝炎

A型肝炎は3月に4件の届出があった。この4件は同一家族で、カキの喫食による感染が疑われたが感染経路や感染源の特定には至っていない。

② つつが虫病

つつが虫病は1月に1件の届出があった。過去5年間は0～3件で推移している。年齢層は60歳代で、県内で感染したと推定された。

③ デング熱

デング熱は4月、8月に2件の届出があり、推定感染地は海外（インドネシア、タイ）であった。過去の発生状況は平成14年に1件届出があったが、それ以降は届出がなかった。

④ 日本紅斑熱

日本紅斑熱は5件の届出があった。報告月は4～6月、9月、11月で多く発生する時期とされている春先から秋であった。年齢層はすべて40歳代以上、県内でマダニ等に刺咬され感染したと推定された。

⑤ レジオネラ症

レジオネラ症は7月、11月に2件の届出（60歳代及び90歳代）があり、病型は共に「肺炎型」であった。感染経路は不明であるが、推定感染地は県内であった。

(5) 五類感染症

① アメーバ赤痢

アメーバ赤痢は3件の届出があり、年齢層は10歳未満、30歳代、40歳代であった。10歳未満の事例はフィリピンでの経口感染と推定された。その他2件は国内感染であるが感染経路は不明だった。

② 劇症型溶血性レンサ球菌感染症

劇症型溶血性レンサ球菌感染症は3件の届出があった。病原体は、いずれもA群溶血性レンサ球菌であった。年齢層は50歳代2件、80歳代1件であった。過去5年間では平成19年、20年に各1件の届出があった。

③ 後天性免疫不全症候群

後天性免疫不全症候群は9件の届出があり、過去5

年間（0～4件／年）と比較して増加した。年齢は20～50歳代、性別はすべて男性、病型は「AIDS」4件と「無症候性キャリア」5件であった。感染経路は国内または海外（国名不明）における性的接触と推定された。

④ ジアルジア症

ジアルジア症は、6月に1件の届出があった。年齢層は30歳代、エチオピア滞在中に経口感染したと推定された。

⑤ 梅毒

梅毒は3件の届出があった。患者は30歳代及び60歳代の男性で、病型は「早期顕症梅毒」Ⅰ期1件、Ⅱ期2件であった。推定感染経路は国内における性的接触であった。

⑥ 破傷風

破傷風は5件の届出があった。年齢層は50歳代2件、70歳代3件で、推定感染経路は、創傷感染であった。過去5年間の発生状況は、50歳代以上の年齢層から年間0～3件で推移している。

2 定点把握対象疾患の動向（表2）

(1) インフルエンザ（鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く）

年間報告数は1,467件で、インフルエンザ（A/H1pdm）が流行した前年（21,983件）より大きく減少し、過去5年間で最も少ない報告数であった。前年は11月末にピークとなる例年より早い時期に流行が見られたが、本年は例年と同様に冬季流行となっている。このため、大きな流行が本年には含まれず、その結果年間報告数が減少した。本年の前期（平成21年／平成22年）は、前年の流行（ピーク第49週：49.68件／定点）が減少傾向となった時期を受け始まったため、9.18件／定点以下で推移した。後期（平成22年／平成23年）は、前年流行が見られた12月に入っても報告数は1件／定点以下で推移し流行は見られなかった。年齢層別報告数は、4歳以下20.1%、5～9歳21.1%、10～14歳14.9%、15～19歳7.8%、20歳以上36%であった。前年と比較して5～9歳の割合が減少し、20歳以上の割合が増加した。

(2) RSウイルス感染症

年間報告数は1,604件であり、前年（398件）の約4倍に増加し、過去5年間で最も多くなった。前期流行（平成21年／平成22年）は、前年第50週頃から増加し、本年第6週にピークとなった後、春に向かってしだいに減少した。後期流行（平成22年／平成23年）では、11月下旬（第47週頃）より増加傾向となり流行し始め、例年同様に冬季に多く発生している。年齢層別報告数では、0歳

表2 内科，小児科，眼科定点報告対象疾患の週別報告数

週	期 間	インフルエンザ	RSウイルス 感染症	咽頭結膜熱	A群溶血性レン サ球菌咽頭炎	感染性胃腸炎	水痘	手足口病	伝染性紅斑	突発性発しん	百日咳	ヘルパンギーナ	流行性耳下腺炎	急性出血性結膜炎	流行性角結膜炎
1	1 / 4 ~	349	55		7	227	36	1		11			13	1	1
2	1 / 11 ~	254	63	1	39	324	23			18			8	1	1
3	1 / 18 ~	288	132	6	16	403	20			14		2	10		2
4	1 / 25 ~	173	155	4	14	383	15			9		4	14		
5	2 / 1 ~	77	151	4	11	337	16			8		2	12		
6	2 / 8 ~	46	162	7	15	274	13			5			11		
7	2 / 15 ~	42	137	6	12	267	35			9	1		18		
8	2 / 22 ~	34	94	2	7	243	24			10			5		
9	3 / 1 ~	30	77	2	12	208	26			14		2	30		
10	3 / 8 ~	14	67	4	13	172	20		1	15		1	35		1
11	3 / 15 ~	8	29	3	12	170	22			9		2	20		1
12	3 / 22 ~	5	14	2	12	164	10			12		7	33		
13	3 / 29 ~	3	16	1	13	156	24		2	10	1	1	25		
14	4 / 5 ~	7		10	11	153	17	2	3	20		4	21		
15	4 / 12 ~	11	7	1	5	137	20	1		26		6	14		1
16	4 / 19 ~	1	4	3	6	140	20	1	1	11	1	2	10		
17	4 / 26 ~		2	3	5	171	19		2	8		8	9		
18	5 / 3 ~			1	10	225	56	1		10		3	26		3
19	5 / 10 ~			3	14	183	27	3		9		13	15		3
20	5 / 17 ~		1	8	7	230	29	9		25		33	24		
21	5 / 24 ~			4	14	162	45	13		15		28	34		
22	5 / 31 ~	1		5	17	176	32	12		9		52	30		2
23	6 / 7 ~			7	9	166	31	6	1	11		74	20		1
24	6 / 14 ~			12	12	128	32	12		20		109	28		
25	6 / 21 ~			2	17	112	27	15	1	11	1	181	18		2
26	6 / 28 ~			1	16	106	17	29	1	14	2	229	13		2
27	7 / 5 ~			9	8	75	37	37	3	21		214	34		1
28	7 / 12 ~			4	9	106	13	55	1	15		168	22		1
29	7 / 19 ~	1		4	14	79	29	89		14		114	26		
30	7 / 26 ~			2	11	81	26	78		14	2	40	36		
31	8 / 2 ~			4	6	101	19	82		13	1	26	23		
32	8 / 9 ~	1	1	5	7	93	43	89		16	1	26	20		
33	8 / 16 ~	3	5	10	12	76	27	82		18		20	28		
34	8 / 23 ~		3	1	15	69	29	64		13	1	18	11		
35	8 / 30 ~	1	3		10	84	24	79	1	25		8	24		
36	9 / 6 ~	1	11		11	87	28	59		17	1	6	25		
37	9 / 13 ~	2	13	6	10	58	31	48	1	17	1	6	24		3
38	9 / 20 ~	3	8	4	13	71	32	15		9	1	2	23		1
39	9 / 27 ~	3	6	1	5	67	24	31		15	1		27		
40	10 / 4 ~	4			12	86	28	21		17		2	24		1
41	10 / 11 ~	4	5	2	4	84	27	7		16	2	1	31		1
42	10 / 18 ~	4	4		10	113	24	10	4	12		1	34		
43	10 / 25 ~	4	11	1	13	142	32	7		21	1		34		
44	11 / 1 ~	34	10	6	26	128	34	7	2	10			54		
45	11 / 8 ~	20	11	3	13	143	54	7	1	14		1	46		
46	11 / 15 ~	8	4		13	177	40	8	1	16		1	63		1
47	11 / 22 ~	9	24	4	12	239	68	8	2	16		1	52		
48	11 / 29 ~	8	47	8	28	308	61	4	1	7			42		1
49	12 / 6 ~	4	39	6	22	353	60	4	1	12		1	55		
50	12 / 13 ~	1	77	1	20	311	52	2	1	14		2	59		1
51	12 / 20 ~	7	76	1	12	282	79	2	1	1		2	86		
52	12 / 27 ~	2	80	1	10	167	62		1	7			45		
合計		1,467	1,604	185	652	8,997	1,639	1,000	33	703	18	1,423	1,444	2	31

32.7%, 1歳30.8%, 2歳21.1%, 3歳以上15.4%であり, 0歳が最も多く2歳以下が全体の約8割を占めており, 乳幼児に多い傾向が見られた。

(3) 咽頭結膜熱

年間報告数は185件あり, 前年と比較して約33%減少し, 過去5年間で最も少ない報告数であった。本年は大きな流行が見られず, 0.5件/定点を超えた週が1週あったのみだった。年齢層別報告数では, 1歳以下29.7%, 2～3歳31.9%, 4～5歳24.3%, 6～7歳10.3%, 8歳以上3.8%であり, 5歳以下が約85%を占めた。

(4) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

年間報告数は652件あり, 前年(945件)と比べ約31%減少し, 過去5年間で最も少ない報告数であった。本疾患は, 冬季および春から初夏にかけて報告数が増加するとされ, 全国ではその傾向が見られたが, 本県では低い水準で推移した。年齢層別報告数では, 2～3歳16.9%, 4～5歳33.4%, 6～7歳23.8%, 8～9歳8.9%, 10～14歳7.8%であった。

(5) 感染性胃腸炎

年間報告数は8,997件あり, 前年(6,137件)の約1.5倍に増加し, 過去5年間では最も多い報告数であった。本年の前期流行は, 前年12月下旬からの流行を受けて始まり, 第3週(17.52件/定点)をピークに減少した。その後, 4月下旬(第17週頃)からやや増加し始め5月中旬になだらかなピークとなり, 6月下旬～10月にかけては4件/定点前後で推移した。後期流行では11月に入り増加傾向となり, 第49週(15.35件/定点)をピークとした後減少傾向となった。年齢層別報告数は, 0～1歳26.5%, 2～3歳25.0%, 4～5歳16.0%, 6～7歳10.3%であり, 乳幼児が多く, 前年と同様の傾向が見られた。

(6) 水痘

年間報告数は1,639件あり, 前年(1,513件)から大きな変動はなかった。本年の前半は前年より低い値で推移したが, 11月(第44週頃)に入り報告数が増加し, 第51週に最も多い報告数3.43件/定点となった。年齢層別報告数では, 2～3歳が37.0%と多く, 次いで4～5歳26.7%, 0～1歳21.6%となっており, 7歳以下の報告が大部分を占めた。

(7) 手足口病

年間報告数は1,000件あり, 前年(544件)の約2倍に増加した。本年は, 5月上旬(第19週頃)より報告数が増加し始め, 7月中旬(第29週)から8月上旬(第33週)にピーク(3.87件/定点)となった後減少傾向となった。本年の流行のピークは前年(2.39件/年)の約1.6倍高

い値を示した。年齢層別報告数では, 3歳以下が約75%と多くを占め, 5歳以下が全体の94%を占めた。

(8) 伝染性紅斑

年間報告数は33件あり, 前年(34件)と同様で, 過去5年間で最も少ない報告数であった。本年は, 年間を通じて報告数が0.17件/定点以下で推移し, 前年に引き続き大きな流行は見られなかった。年齢層別報告数では, 報告数が少ないこともあるが, 14歳以下の年齢において大きな偏りがなかった。

(9) 突発性発しん

年間報告数は703件あり, 前年(686件)から大きな変動はなかった。過去5年間では680～800件で推移しており, 各年の報告数の差は僅差である。本年の推移は, 前年とほぼ同じで季節的変動は見られなかった。年齢層別報告数では, 1歳以下が94.9%を占めており, 前年と同様の傾向であった。

(10) 百日咳

年間報告数は18件あり, 前年(19件)と同様であった。年齢層別報告数では, 10～14歳及び20歳以上38.9%と最も多く, 次いで2～3歳が11.1%であった。前年と比較すると20歳以上の割合が増加し, 1歳以下の割合が減少している。

(11) ヘルパンギーナ

年間報告数は1,423件あり, 前年(429件)の約3.3倍に増加し, 過去5年間では最も多い報告数であった。例年夏季を中心に多発する疾患であり, 本年の流行は5月中旬から9月にかけて見られ, ピークは6月下旬(第26週:9.96件/定点)であり, 過去10年で比較すると平成13年に次いで大きな流行となった。年齢層別報告数では, 1歳以下26.8%, 2～3歳40.2%, 4～5歳21.2%, 6歳以上11.8%であり, 5歳以下が約9割を占めた。

(12) 流行性耳下腺炎

年間報告数は1,444件あり, 前年(399件)より約3.6倍に増加し, 平成17～18年の流行後4年ぶりの大きな流行となった。本年は, 年間を通じてほぼ前年を上回って推移した。10月(第40週)以降の増加傾向は12月になっても続き, 第51週(3.74件/定点)にピークを示した。年齢層別報告数では, 4～5歳が34.3%と最も多く, 次いで2～3歳24.4%, 6～7歳22.0%と, 2～7歳が全体の約8割を占めた。

3 眼科定点報告対象疾患の動向

急性出血性結膜炎は, 平成18年以降報告がない状況が続いていたが, 本年は, 1月に2件の報告があった。

流行性角結膜炎は, 年間報告数が31件あり, 前年(24件)から大きな変動はなかった。第18週, 19週, 37週に0.75件/

定点となったが、それ以外の週は0～0.5件／定点で推移した。

4 基幹定点報告対象疾患の動向

(1) 週報告対象疾患

細菌性髄膜炎は、年間報告数が10件と過去10年間で最も多い報告数であった。年齢層別報告数では4歳以下2件、10～14歳1件、50歳代1件、60歳以上6件であった。病原体は肺炎桿菌、緑膿菌、インフルエンザ菌が各1件ずつ検出されている。

無菌性髄膜炎は、年間報告数が2件(20歳代、60歳代)あった。過去5年間の報告数は0～4件で推移している。

マイコプラズマ肺炎は、年間報告数が43件あり、過去10年間で最も多い報告数であった。6月中旬以降報告が続き、これまでの散発的な報告とは異なった傾向を示した。年齢層別報告数では、1～5歳27.9%、6～9歳32.6%、10～14歳25.6%、15～19歳9.3%、30歳代4.7%であり、その他の年齢層からの報告はなかった。

クラミジア肺炎は、調査以来はじめて1件(30歳代)の報告があった。

(2) 月報告対象疾患(表3)

薬剤耐性菌感染症の総報告数は473件あり、前年(396件)より増加した。疾患別ではメチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症が大部分を占めている。

メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症は、年間報告数が439件あり、前年より増加した。年齢層別報告数では60歳以上が全体の8割を占めた。

ペニシリン耐性肺炎球菌感染症は、年間報告が23件と前年(11件)と比較し約2倍に増加した。年齢層別報告

数では10歳未満が全体の約7割を占めた。

薬剤耐性緑膿菌感染症は、年間報告数が11件であり、前年(7件)より増加した。年齢層別報告数ではすべて30歳代以上であり、70歳以上が全体の約5割を占めた。

5 性感染症定点報告対象疾患の動向(表4)

性器クラミジアは、年間報告数が172件(男性148件、女性24件)と前年(145件)より増加した。年齢別報告数では、35～39歳の年齢層の報告が最も多く、20歳代、30歳代の報告が全体の72%を占めているが、10代前半からの報告もあった。

性器ヘルペスウイルス感染症は、年間報告数が93件(男性60件、女性33件)であり、前年(77件)より約20%増加した。30～34歳の年齢層の報告が最も多く、30歳代で全体の約1/3を占めた。

尖形コンジローマは、年間報告数が60件(男性47件、女性13件)であり、前年(48件)より増加した。15歳以上の年齢層から報告があるが、20歳代、30歳代の年齢層が全体の約6割を占めた。

淋菌感染症は、年間報告数が31件(男性30件、女性1件)あり、前年よりやや減少した。年齢層別報告数では、15～49歳で報告があったが、20歳代の年齢層からの報告が多かった。

IV まとめ

平成22年の感染症発生動向調査に基づく患者発生状況について、その動向を検討した。

全数疾患では特筆すべき疾患はなかった。

小児科定点報告疾患では、RSウイルス感染症、感染性胃腸炎、ヘルパンギーナの3疾患で過去5年間に於いて最も多

表3 基幹定点(月報)報告対象疾患の月別報告数

	メチシリン耐性 黄色ブドウ球菌 感染症	ペニシリン耐性 肺炎球菌感染症	薬剤耐性緑膿菌 感染症
1月	46	1	1
2月	49	1	—
3月	31	2	—
4月	32	2	1
5月	23	4	—
6月	43	4	—
7月	41	1	3
8月	37	1	1
9月	33	—	1
10月	28	3	3
11月	38	1	1
12月	38	3	—
合計	439	23	11
前年	378	11	7

表4 性感染症定点報告対象疾患の月別報告数

	性器クラミ ジア感染症	性器ヘルペ ス感染症	尖形コンジ ローマ	淋菌感染症
1月	11	6	6	1
2月	13	6	—	1
3月	14	12	10	4
4月	12	3	4	3
5月	25	10	2	6
6月	22	6	5	2
7月	13	7	8	2
8月	11	7	10	3
9月	16	16	4	—
10月	10	7	6	2
11月	8	5	2	1
12月	17	8	3	6
合計	172	93	60	31
前年	145	77	48	37

い報告数であった。手足口病では前年の2倍の報告数であった。流行性耳下腺炎は、平成17～18年の流行後4年ぶりの大きな流行がみられた。その他の疾患の報告数は前年と比較し同程度または減少した。

眼科定点報告疾患では、急性出血性結膜炎が平成18年から4年ぶりに報告された。流行性角結膜炎は前年と変化がなかった。

基幹定点報告疾患では、週報告対象疾患の細菌性髄膜炎及びマイコプラズマ肺炎が過去10年間で最も多い報告数であった。また、クラミジア肺炎は調査以来はじめての報告が

あった。月報報告対象疾患である薬剤耐性菌感染症はすべての疾患で前年を上回った。

性感染症疾患では、総報告数の約半数を性器クラミジア感染症が占めた。総報告数は増加傾向で、報告数の多い20歳代、30歳代を中心にさらに啓発を行う必要がある。10歳代からも報告があるため、中学生など若年者に対する予防教育も重要となる。

今後も引き続きデータの集積を行い感染症の発生動向に注意していくとともに、迅速かつ適切な情報提供を行っていき